

論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツ語圏の文学史上において一般に「言語危機」という概念で括られる世紀転換期（19世紀末～20世紀初頭）の現象を、作家の言説のパフォーマティヴィティ（行為遂行性）の観点から考察したものである。「言語危機」とは、詩的言語によって新たな共同体を創出する作家という特別な存在が演じられるために創出された言語空間であるという前提に立つ本論は、旧来の文学史記述の再検討を試みるものでもある。その際にフリッツ・マウトナー（1849-1923）、フーゴ・フォン・ホーフマンスタール（1874-1929）、フランツ・カフカ（1883-1924）の3人の作家を中心的に取り上げ、彼らの言語観の相違が共同体のイメージと作家の自己意識に影響したことを明らかにしている。

まず序論では、先行研究において「言語危機」という概念が時代区分として自明の事実として想定されていたこれまでの文学史研究に疑問をなげかけ、むしろ「言語危機」は詩的言語によって特別な地位を得ようとする作家が自己を演出し、詩人という特別な存在が上演される空間であったとみなすべきであり、その意味でパフォーマティヴィティの観点からの考察が必要であるという本論の基本姿勢が示される。

第1章では本論文の理論的前提として、パフォーマンス理論を「言語危機」の言説分析の方法論とする意味が説明される。パフォーマンス理論は、言語行為論を提唱したJ.L.オースティンの「行為遂行的(performative)」発言の概念に由来し、発話によって何らかの行為（主張、約束、命令など）が遂行されるとみなすものである。「行為遂行的」という概念は1980年代に文化学の領域に応用され、言語的発話のみならず日常的な行為の現実構築的な効力に着目したパフォーマンス・スタディーズへと展開していく。ドイツ語圏ではエリカ・フィッシャー・リヒテが文化的・社会的次元での言表や行為の意味付与作用が有する行為遂行性を演劇における上演とパラレルに捉えることによって、文化は特定集団の成員による行為遂行によって演じられるものであるという「劇場性(Theatralität)」の概念を確立した。本論文で筆者は、作家の言表を「劇場性」の概念に依拠しつつ、言表が発せられる言語空間を作家によって演出され構築されるものであるという理論的前提に立つ。パフォーマティヴィティに着目する言説分析によって、本論文は文学テキスト研究に新たな視野を拓いているところに、独創性が認められる。

第2章では、フリッツ・マウトナーの言語批判と言語観が考察される。同化ユダヤ人として19世紀後半をプラハで青年時代を過ごしたマウトナーは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の発足後に顕著になったチェコ民族主義と公教育におけるチェコ語導入を経験した。後の言語批判につながる基盤はマウトナーがおかれていたこの多言語・多文化的環境であったと筆者は指摘する。つまり官吏や教育、文学の言語としてのドイツ語、ボヘミアの言語であり農民たちの言語であるチェコ語、旧約聖書の言語であるヘブライ語を学ぶ必要性がありながら、どの言

語にも文化的帰属性を見いだすことができないという矛盾である。言語と社会集団の問題は『言語批判論考』（1901-1902年）において展開される。この論考でマウトナーは、一方では言語を「外界に対する能動的かつ物理的な身体運動」であり、それを「想起(Erinnerung)」する個人的感覚と捉え、他方ではコミュニケーション手段としての言語を社会的集団によって共有された「記憶 Gedächtnis」とみなす。コミュニケーションを成立させる言語は、集団的記憶の権力下におかれ、個々人の感覚はそこに反映されることがない。結果としてマウトナーは個人の偶発的な感覚に基づく言語活動を担う者を「詩人」として特別な位置づけを与える。筆者はこの「詩人」を集団的言語慣習から外れた周縁部に位置づけられる例外者であると論じ、これに「例外的形象(Figur)」という概念規定を与えている。形象はイメージであると同時に、発話行為の効果によって実体的な人物の形をも取りうるものという二重の意味合いを持つ。しかしマウトナーの場合には、詩人という「例外的形象」は实在可能性のないものとどまると筆者は指摘する。

「詩人」の言語によって個人的感覚を保持する表現可能性を求め、自我を詩的言語の領域に救出するマウトナーの試みは失敗せざるをえなかった、と筆者は論じる。マウトナーが求める詩人の言語は伝達可能性を拒否する言語であるという遂行矛盾の形でしか示しえないからである。しかしマウトナーの『論考』が、言語批判者は同時に詩人であるという思考パターンが世紀転換期に形成される端緒となったことを、筆者は同時代の批評雑誌や新聞の論評等の検証によって明らかにしている。

第3章では、マウトナーの言語批判から大きな影響を受け、世紀転換期の「言語危機」意識を代表するとみなされる作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタールが考察され、ホーフマンスタールの著作のうち、『手紙』(1901)、および講演「国民国家の精神的空間としての著作」(1927)を分析の主な対象として、作家という特別な存在が演出される場としての言語空間が新たな共同体構想に結びつけられる構図を描きだしている。筆者はまず、これまであまり着目されてこなかった2つの断片『W夫人の対話と物語』『ユピテルとセメル』の分析を通じてマウトナーの言語観との類似性と相違点を明らかにする。マウトナーとの共通点は、通常言語によって表現しえないもの（「言葉なき被造物」「体験の最深部」）を解読し表現にもたらず詩的言語の特性を認める点であるが、「詩人」の实在性を否定するマウトナーとは異なって、ホーフマンスタールは、特殊な詩的言語の担い手となる「詩人」をテキストの中に示すことであると筆者は指摘する。しかもこの「詩人」となりうる者が、ホーフマンスタール自身であることがテキスト内に示唆されるという。つまり「詩人」をパフォーマンスに登場させる言語空間をホーフマンスタールは作りあげていることになる。

この考察は、3.2.『言語危機』の表現とその演出」でさらに明確化される。世紀転換期の言語危機を代表するとされる作品『手紙』(1902)は、1603年8月22日の日付が付されフランシス・ベーコンに宛てた架空の書簡の形をとり、手紙の書き手チャンドス卿が自身の文学的能力

の喪失状況を記したものとなっている。このテキストはこれまでの文学史記述においては、同時代の認識論、言語哲学、心理学において見られる種々の危機意識（主体の危機、知覚の危機）の文学領域における並行現象であると見られることが多かった。しかし筆者はこのテキストの架空の書簡という構造が、書く行為と解読する行為が表裏一体の関係を創り出し、書くこと（あるいは書くことが不可能なこと）を自己言及的に語ることによって、書かれたものを解読する可能性を開いているという。ここにおいて言語危機は、言語によって語る詩人によって克服が可能なものとなる視点が創出される。したがって言語危機は、ホーフマンスタールにとって特別な言語を使用できる詩人としての自らの場を演出するものであったと結論される。

通常言語の慣習の枠外に詩的言語の場を切り開くという思考は、その後のホーフマンスタールにおいては、「精神的空間としての国民・国家」という構想に結びつく。第一次世界大戦中にホーフマンスタールは、チェコ民族主義や汎ドイツ主義の渦巻くなかで、理念的共同体としてのオーストリアを求めていた。その共同体としてのドイツ語は、「コミュニケーションの彼方にある」個人的言語であるとする。この点ではマウトナーとの類似性が観察できる。しかし1927年の講演では、新たに形成されるべき「より高度な共同体」において個々人を統合しうる特別な主体の出現を求め、その特別な主体の位置に詩人としての自らを重ね合わせることになる。つまり言語危機はホーフマンスタールにとっては、自らを特別な主体として登場させうる言語空間を創出するパフォーマティヴな効果であったと著者は結論づける。

第4章では、同じく言語危機という言説を受容しながら、まったく異なった方向をとったカフカが考察される。カフカを「言語危機」という問題系の中で扱うことには異論もあるが、筆者は同時代の言説とどの程度結びつくかについて4.1.で論じている。特に初期の作品『ある戦いの記録』（1907）における身体と言語、現実と非現実の間を媒介する一種魔術的な言語や、自我と他者との流動的な関係の表現などは、言語危機の言説の影響を受けているものだと著者は述べる。しかしマウトナーの場合には、言語危機の意識が、多文化・多言語状況におけるアイデンティティの確立の問題に結びつき、ホーフマンスタールの場合には詩的言語による共同体の構想に帰着したのとは異なって、カフカにおいては共同体はつねに不在のままである。この点を明らかにするために、著者は4.2.で同時期におけるシオニズム運動の言説を検証している。カフカはプラハの学生シオニスト団体「バル・コホバ」や文化的シオニズム運動と関係を持ったことはすでに先行研究でも指摘されている。その中でマルティン・ブーバーやグスタフ・ランダウアーの言説を知った可能性が高いと筆者は指摘し、その思想を詳細に比較検証している。ブーバーはヘブライ語復興を通じてユダヤ民族の物理的な離散状態を精神的な言語共同体として克服しようとしたのに対して、社会主義に傾倒していたランダウアーは共同体を言語ではなく労働によって生成するものと捉えていた。ブーバーとランダウアーの影響は、カフカの未完の作品『万里の長城の建設に際して』に見られるが、彼らのシオニズム思想とカフカの差異は、長城建設の完了から始まるこのテキストが、つねに不完全であり、未完成な部分の建設が延々

と続き、完成した部分も外部のノマドによって破壊されていく、という構造を持っている点である。つまりブーバーとランダウアーのシオニズム思想が、最終的なユダヤ民族の統一を想定しているのに対して、カフカのテキストは不可能が可能になる克服の可能性を否定し、共同体を形成しうるような特別な言語を操作する主体に場を与えていないことである。

「新たな言語」による共同体の創出が言語危機に共通する思考であったのに対して、カフカの作品はその不可能性を示していることを、筆者は『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミの一鱗（1924）』の分析を通じて明らかにしている。この作品は、ネズミの民族の統一と一体感を得るものが音楽とは言えない歌声であり、また同時に歌声を聞かずに個人の夢を見るのが民族の合一の条件となるという矛盾した物語である。しかも最後には歌姫は失踪するために、民族を統合する特別な主体も否定される。この作品の分析によって、カフカはマウトナーやホーフマンスタールにおいて要請された詩人という例外的形象の可能性に否定的であったことを筆者は指摘する。

結論において筆者は世紀転換期における文学と作家の位置づけから「言語危機」の言説を再検討している。フーコーが指摘しているように18世紀末から19世紀初頭以来、文学作品の匿名性が不可能になった状況のなかで「作者」に特別な位置づけを必要とした。世紀転換期における「言語危機」の言説は、認識論や言語哲学と同様の問題に直面しながら、詩的言語や詩人に特別な位置づけを確保しようとする、この時期における文学や作家の自己演出の言説空間であり、それを否定したのがカフカであった、と著者は結論づける。この意味で本論文は、旧来の文学史記述を大きく書き換える潜在力を持つものであると言える。

審査においては、テキスト解説に関して必ずしもパフォーマンスティヴィティの理論と接合しない部分があり、またテキスト読解における誤解があることも指摘されたが、本論文が先行研究を広範にわたって検証し、筆者独自の視点を打ち出しつつ、精密なテキスト分析を行っている点について高く評価され、本論文が博士号取得の条件を十分に満たしている点で、審査委員全員の同意に至った。

論文審査委員： 主査 大 貫 敦 子 教授
小林 和貴子 准教授
平 野 嘉 彦 特別非常勤講師
(東京大学名誉教授)